

津村節子

冬銀河

冬銀河

朝日新聞社

冬銀河

一九八二年三月三〇日第一刷発行

著 者 津村節子

発行者 初山有恒

発行所 朝日新聞社

東京都中央区築地五丁目三番二号 郵便番号一〇四

電話東京〇三(五四五)〇一三一

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替東京〇一七三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

定価一、一〇〇円

©1982 Setsuko Tsumura PRINTED IN JAPAN

0093-254974-0042

目次

惑い

5

女の教室

40

雪崩

77

一すじの髪

109

ひめごと

143

不意の客

169

美濃の旅

210

奔流

236

装丁 三田恭子

冬
銀
河

惑い

景子は、軽く眼を閉じて仰臥していた。

顔にかけられているガーゼを通して、柔らかな光が眼底を明るくさせている。

うなじは、首枷のように刳れた陶製の洗髪用の槽に固定され、軀は水平近く倒されている椅子に、無防備な姿勢で寝かされている。

若い男の、しなやかで強い指先が、生温かい泡に包まれた頭部を刺戟し、優しく髪をしごいている。覆いかぶさるように近々と男の顔があると思うと、景子の軀は緊張してしまう。が、決して不快というわけではない。

シャンプー剤が洗い流され、香りのよいリンスで仕上げられた髪は、ハンドドライヤーとブラシで形づくられてゆく。係は若い見習いから三十歳ぐらいの技術者に替わった。

高校時代の友人河村翠に紹介された美容室で、店主も男、

技術者たちも大半が男である。

景子は、鏡にうつっている白い長袖のブラウスを着た男の、多少演技がかったブラシの扱い方と、髪を思いのままにする手際のよさに見入っていた。

「女の美しさを捉えるのは、やっぱり男だと思うわ。フランスの有名デザイナーだって、断然男が多いじゃないの」
翠は言うが、この美容室が中年女性で繁昌しているのは、技術的な面ばかりではないようである。

景子は、丁重な男たちの声に送られて、美容室を出た。
上気した頬が、外気に触れて心地よかった。

大変よくお似合いになります、という言葉も満更商売用のものとは思えず、心はずんでいた。華奢で小柄なため、年には見えないのだが、軽やかなショートヘアにしたので更に三つ四つ若く見える。

彼女は今年三十八歳になる。今日で十四回目の結婚記念日を迎えた。これまで、結婚記念日など祝ったことはないのだが、正志がちょうどこの土曜日曜にかけて休みがとれそうだというので、ささやかなお祝いを二人だけでしたい、と景子が提案し、かれも承知したのだった。

景子は、正志と初めてあった銀座のレストランへ向かう途中、時間が少しあるので時計店をのぞいてみた。記念に何か欲しい物を買ってやる、と正志が言っていたので、下

見をしておこうと思ったのだ。

景子は物持ちのいいほうで、結婚する時に買った腕時計をまだ使っている。故障はしないが、デザインが古くなったので、プレスレットのような華やかなデザインのクォーツの腕時計を買いだと思っていた。

約束のレストランに着いたのは、定刻より十分ほど前だった。細い階段を昇り、二階の通りに面した窓際の席に着くと、ウェイターがテーブルの上のランプに灯を入れた。

ガラス窓越しに暮れなずむ通りを見下ろしていると、土曜日のせいか二人連れの男女が目につく。景子も結婚前は男の友達と銀座を歩いたこともあったが、こうして夕暮れどきにレストランで相手を待つ気分など、遙か遠い昔のこととして忘れてしまっていた。

待つ相手が、十四年間も連れ添った夫であっても、景子は胸がときめいていた。正志は建設会社に勤務しており、転勤が多い。現在も大阪に単身赴任しており、月に二、三度東京出張をかねて帰って来る程度である。結婚記念日にちょうど帰って来られるというのは、ほとんど僥倖というべきであった。

景子は、席を立てて正志の実家へ電話を入れた。

「今日はすみません。史織はもう行っておりますか」

「ええ、いま来たところよ。発表会が近いのでピアノのレ

ッスンが少し延長になったそうなの」

「あまり遅くならないうちに迎えに行きます」

「せっかくだからゆっくりしらいたいでしょう。史織は今夜泊まると言っているわ」

「そうですね。じゃあそうしていただくかもしれません」

姑に代わって史織が出た。

「お母さん、私泊まってあしたお昼までに帰るわ。お父さんどうぞごゆっくり」

「まあ、お父さんだってあなたに会いたいものよ。なるべく早く帰っていらっしやい」

「お父さんは、今度いつまでいられるの？」

「まだよく予定は聞いていないのよ。二、三日はいられると思うけれど」

「いま銀座？ チョコレートケーキ買って来てね」

ませたことを言っても、やっぱり子供なのだ、と景子は頬をゆるめながら受話器を置いた。

席に戻ると、景子は再び所在なく窓外に眼をやった。約束の時間より二十分過ぎていた。注文は、連れが来るまで、とまだ何もしていない。夕食どきで、席はあらかたふさがったようである。恋人同士らしい若い二人、家族連れ、女だけのグループ、夫婦とは見えぬ雰囲気の中年の男女もいる。

新幹線に乗り遅れたのだろうか。それにしてももう来る筈だ、と入り口の方を見やった時、ウェイターが慇懃な物腰で近づいて来た。

「氏家さまでいらっしゃいますか」

「ええ、そうですが」

「御主人さまからお電話でございます」

景子は悪い予感がした。遅れるという連絡ではなく、来られなくなったのではないかと咄嗟に思った。悪く考える癖がついている。早く失望してしまうほうが、傷は浅いのだ。

「すまないが、今度は帰れなくなった」

「そう。何だかそんな気がしたわ」

「いま伊丹にいる。これから札幌支社へ飛ばなければならぬ」

「札幌の帰りには寄れないの？」

「多分駄目だと思うが、寄れば一泊ぐらいしたいと思っているよ」

「忙しいのね」

「今日は史織と二人で食事してくれ」

「史織はおばあちゃんにあずけるって言ったでしょう」

「じゃ、きみ一人でうまいものでも食って、買い物して帰りなさい」

慌ただしく電話が切れた。

やはり直感はある。楽しみにしていただけに、落胆は大きかった。

いったい会社は、社員たちの家庭をどう考えているのだろう。自社の発展のためなら、ちっぽけな個々の家庭など、どうなってもかまわない、と思っているのだろうか。

正志はいま電話で、寄れば一泊ぐらいしたい、と言った。家へ帰るのではなく、泊まると言うのだ。夫にとって、家は仮の宿でしかないのだろうか。

景子は四十分近くもテーブルに着いていて、何も食べずに帰るのもためらわれ、しかし食欲が萎えてしまったのでスープと一品料理を注文した。飲み物をたずねられたが、一人でワインを飲む気にもなれない。

よく磨かれた銀製のスプーンで、コンソメスープを口に運んでいたとき、景子はふとその手をとめた。

夫は確か伊丹にいると言った。

が、受話器を通して聞こえてきたのは、慌ただしい空港の人身や物音ではなく、静かな霧囲気の中に、ステレオでもかかっているような音楽が流れていたような気がする。

夫は、どこから電話をしていたのだろう――。

景子はスプーンを皿に置いたまま、ぼんやりと考え込んだ。

が、すぐ馬鹿げた疑念を払った。

はつきり聞こえたという確信はない。また、もしそうであつても、ステレオの設備のある空港内の喫茶店からでも電話していたのかもしれない。受話器から音楽が聞こえてきたからといって、気にするほどのことでもないのに、と景子は自分の神経を滑稽に思った。

景子は、味気ない食事をすませてレストランを出た。

今夜は娘のことを案ずることもない。夫も帰つては来ない。思いがけなく自由な自分の時間が与えられたのである。が、夜一人で銀座を歩くのは、結婚以来初めてであることに気づき、景子はとまどいを感じた。

クラス会のあと、数人で銀座へ出て買物をしたり、お茶を飲んだり、また、妹や親しい友人と食事をしたり、映画や芝居を観たあとなどに銀座をぶらつくことは時たまある。夫が毎日帰宅する家庭とは異なり、景子は遙かに拘束が少ないわけだが、史織をどこかに預けてまで夜間の外出をする用事もないし、また、したい気持ちもない。

しかし、今夜はせっかくの機会なのだから、と景子は銀座通りを歩いてみた。気をつけてみると、一人で歩いている女も多い。

景子は、正志に相談してから買おうと思つていた腕時計を買うことにした。濃い青色の文字盤に、銀色の点が数字

の代わりに填め込まれているものが気に入って、その場で腕につけてみた。

古い時計を箱に収めて包んで貰い、店を出るときちょっと左腕をかざしてみる。冴えた夜空に星がちりばめられているような美しい時計が、七時四十分を指していた。

目的の時計とチョコレートケーキを買うと、もう景子はすることがなくなり、近くの地下鉄乗り場の階段を急ぎ足で降りた。一人で店々をのぞいて歩いても面白くもなく、コーヒーを飲む気にもならない。ましてバーなど、一人ではいったこともない。

夫の実家へ着いたのは、まだ八時半を少し過ぎた頃で、姑は訝しように景子を迎えた。

「どうしたの？ 正志は？」

「急に帰れなくなつてしまつて」

「そう、残念だったわね。こんなことなら、史織を連れて行けばよかったのに」

史織と一緒にいたら、まだ楽しかったかもしれない。娘と夜の銀座も悪くなかつたらう。

「いつもそうなんです。あきらめていますわ」

「だけど、本当に忙しい人ねえ。いつになったら一緒に住めるようになるのかしら」

姑は、結婚記念日を一人銀座で過ごした嫁を不憫そうに

見つめた。

史織はテレビの歌謡番組を観ていたが、明日家に帰って
からでないとい食べられない筈のチョコレートケーキを持っ
て母が来たので、大喜びであった。父が帰って来なかった
ことには、さして落胆していない。父の居ない生活には馴
れているのだ。

「おじいちゃまがお風呂から出たら、二人でおはいり」

マンションの浴室は、わずかな余裕もないぎりぎりの空
間で、浴槽も手足を縮めなくてははいれない。限られたス
ペースに部屋数を多くしようとすれば、皺寄せは収納部分
や浴室、洗面所などにくる。

この家の浴室は、風呂好きの舅が老後の唯一の贅沢だと
言って作らせたもので、洗い場も広々としており、位置も
優遇されていて坪庭が見えるように設計されている。風呂
嫌いの史織が、温泉に来たようだと喜んではいない。

「どうした。景子一人か」

湯あたりしたような火照った顔で、舅が居間にはいつて
来た。

「急に札幌支社へ行くことになったそうで」

「急にと言っても、景子が出かける前までに連絡出来ない
ほど急だったのか」

六時までに銀座のレストランに着くには、新大阪駅を遅

くも二時半頃には発車するひかりに乗らなければならない。
それに乗らなかつたということは、二時半にはすでに札幌
行きが決まっていたということになる。

その時点で連絡してくれば、一人で銀座まで出かけ、
四十分も待っていることはなかつたのだ。

「私、美容院へ行くので、早く出てしまいましたから、そ
の留守に電話があつたのかもしれない」

景子が家を出たのは三時過ぎである。が、無意識に夫を
かばうように言っていた。

翌朝、姑と一緒に食事の支度をしている時に、

「時々、大阪には行っているの？」

とたずねられた。

「気にはなっているんですけど、史織がいますので」

「史織はいくらでもうちであずかるわ。あまり放っておか
ないほうがいいと思うけれどね」

「札幌にいた時よりは近くなって、時々帰って来ますし、
夏休みには史織を連れて行って、掃除や洗濯をして来まし
た」

「そう。でも男の一人暮らしは不自由ですからね。単身赴
任は馴れていると言つても、もう正志も五十近いんだか
ら」

景子もそう思うのだが、正志はいつも、

「大丈夫だよ。一人暮らしも馴れれば苦にならない。朝はちゃんとハムエッグぐらいは作って食べている。昼、夜は外食だが、栄養のバランスは考えているさ」

と、とりあわない。

洗濯はシーツなどの大物はクリーニングに出し、下着類は全自動の洗濯機で処理しているという。事実、洗濯物を持ち帰ることはほとんどない。掃除は、彼のような單身赴任の男たちのアパートを廻る掃除婦と、週二度の契約をしている。

「おじいちゃまも私もあなたには感謝しているのよ。貴子さんのようになって貰いたくないの」

貴子は、正志の先妻である。

離婚の理由は性格の不一致ということだが、もともと他人同士、生まれも育った環境も異なるのだから、考え方も日常の習慣も違って当然である。一つ屋根の下に暮らしながら、お互いに妥協点を見つけ、努力して歩み寄ってゆくより仕方があるまい。

だが、正志と貴子の場合も、別居期間が長かったようで、それは初めのうちこそ新鮮だったと言えるかもしれないが、理解を深める時間が足りなかったのではないか、と景子は自分に置き替えて考えるようになった。

景子も、史織が小学校三年終了までは、正志の転勤と共に

に転居していたが、高校まで続いている女子の私立中学校へ進ませることに決めてから、東京に居を定めた。それ以来今日まで五年近く、別居生活が続いている。

正志と貴子の間には、由美という娘がいた。由美が高校を卒業するまで月々養育費を送る約束になっていたが、短期大学卒業まで延長され、現在も送り続けている。

由美は正志の二十九歳の時の子で、現在十九歳だから、あと一年余り送金は続けられる。先妻とは他人になっても、娘とは血が繋がっているのだから、送金が完了しても縁が切れるというわけではないが、一応経済上の責任は果たしたことになる。それが終わるまで、景子はやはり気が重かった。

舅や姑が、景子に感謝していると言うのは、口先ばかりではないようだ。景子は二十四歳の若さで、十歳も年上の離婚歴のある男と結婚したのである。今度の嫁は可愛い孫を連れて去るようなことがないように、と二人が願っているのは事実だった。

その日、史織の学校の父母会に出席するため、景子は紅茶とクッキーだけの簡単な昼食を早めに済ませた。史織の通っている私立の中学校は給食がないので、朝食と弁当はきちんと作るが、自分一人の昼食は、いつもあり合わせの

もので手軽に済ませてしまう。

二学期最後の父母会では、学年全体の成績や、素行についての注意事項、冬休みに行われるスキー合宿についての説明などがあった。そのあとクラス別の懇談会が開かれ、担任教師からの家庭に対する注文や、父母からの質問が交わされたが、個人面接を希望する者は、更にそのあとまで残ることになっている。

景子は、日頃から父親不在の家庭を気にしており、史織が他の生徒たちと異なる点はないか、とたずねてみた。

「お父さまは、月にどのくらい帰っていらっしゃるのですか」

「決まってはおりませんが、ひと月に二度かふた月に三度というところでしょうか」

「お父さまのない方や、海外へいらしたきりで、一年も、それ以上も帰っていらっしゃらない御家庭もうちのクラスにはありません。史織さんは、まだそういう生徒さんから較べればお倅せなほうです。ただ一人っ子でいらっしゃいますから、過保護になりませんよう。お父さまもたまに帰っていらっしゃれば、留守中の埋め合わせで溺愛なさるでしょうし。明るくていいお嬢さんですが、積極性自立性に欠ける面が見られますので」

その程度のことと、特に心配な点はないと言われ、景子

は安堵して教室を出た。

昇降口で、スリッパを靴とはきかえていると、わっ、という声と共に背を叩かれた。

「史織ったら、驚くじゃないの」

「だって、驚かそうと思ったんだもの」

「今日は午前中で終わりでしょう。もう帰ったかと思ったわ」

「図書室に行っていたんだけど、そろそろ終わる頃だと思っ

て待っていたの」

言いながら、母親にびったりと軀を寄せてくる。

「先生がおっしゃってたわ。少し過保護じゃないかって。中学二年にもなって、甘えん坊なんだから」

「それは私のせいじゃないわ。過保護というのは親の責任でしょ？」

「お母さんも反省したわ。あなたも自覚して頂戴」

しかし、留守がちの父親の分まで愛情を注いでやりたい、とつい甘やかしてしまう。友達と先に帰らず、三時間あまりも待っていた史織が、やはりいとしくてならない。

史織はそうした母親の気持ちに鋭敏に察知して甘えかかる。いつまでも子供でいたいという気が、史織には強いようであった。

「お母さん、このまま帰るの？」

史織は鼻にかかった声で言った。

「夕食の買い物をしてからね」

「買い物をしてうちへ帰って、それから御飯の支度をする
と遅くなるでしょう？ 私、おなか空いたわ」

「それで、お母さんを待っていたのね」

景子は苦笑した。母と娘の二人暮らしでは、他に気を兼ねる存在はなく、外食しようと思えばいつでも自由である。ただ、気を許せば生活がとめどなくルーズになりそうで、景子はそういう自分が怖い。

「ねえ、ラーメンでもいいわ」

「ラーメンなんて、いつでも食べられるじゃないの。今日
は何かおいしいものでも食べましょうか」

母と子の、変わりばえもしない日々。たまには史織と外
で食事するぐらい、何をためらうことがあろう。

レストランがいいか、中華料理にしようか、と思索して
いるときに、今日は河村翠が始める小さなサロンのオープ
ニングパーティーの日であることに気づいた。

彼女の話だけでは、そのサロンなるものがどういうもの
かわからなかったが、月に一度か二度、小さな音楽会を催
したり、珍しい料理を試食したり、ダンスパーティーを開
いたりするという。

翠は結婚後わずか数年で画家の夫と死別し、姑を抱えて

生活の手段を考えていたが、四年ほど前に、遺された古い
家に手を加えてレストランを開業した。そんな商売を思い
ついたのは、彼女の弟が大学進学を嫌って、コックの修業
をしていたからである。

大々的に改築したのは台所で、台所に続く納戸と合わせ
て広い調理場にしたほか、広い庭に面した食堂に四組ほど
のダイニングセットを入れ、アトリエや小部屋もそのまま
個室として使っている。

初めのうちは、夫の友人たちや、近所に住む人々が、時
折家族連れで来たり、来客を自宅でもてなす代わりを利用
したりしていた。が、閑静な高級住宅地にある風変わりな
レストランとして、女性雑誌に紹介されたりしてから俄に
客がふえ、最近では相当に繁昌しているようだった。

「翠さんがね、サロンを開いたの。今日そのお祝いの会が
あるのよ、行ってみましょうか」

「サロンって、アベリアの支店？」

アベリアは、翠の経営するレストランの名で、なだらかな
南斜面の芝庭を縁どっているアベリアという植物からつ
けたという。常緑の低木で、夏から秋深くまで淡桃色のつ
りがね状の花が咲き続ける。

史織の支店という言い方がおかしくて、景子は笑ったが、
自分でもよくわかっていないサロンの性格を説明すること

は出来ず、

「行ってみなければ、お母さんもよくわからないのよ。今日はスペインの踊りがあって、御馳走も出るんですって」と言うより仕方がなかった。

景子は、こういう催しの折に何を持って行くべきか思いあぐねて、花屋で大輪の洋蘭を二輪、緑を添えてブーケにして貰った。レストランを経営している翠に、ワインや菓子など持って行っても仕方がない。多分花は重なると思うが、蘭は他の花がしおれたあとと匂い続けるだろう。

サロンは、アトリエの内部を改装したものだった。

天井が高いのを利用して、中二階の位置に三方から二列ほどの客席を張り出して設け、ホールを見下ろせるように設計されている。もともとアトリエだったホールはあまり広くないが、半分をステージに見たてて空けてあり、あと半分の床に椅子が並べてあった。

集まって来ている人々はアベリアの常連らしく、階下の席も中二階の席もすでにふさがっており、溢れた客は、ホールから中二階へのびている装飾的な細い階段に一列に並んでいる。

男の客は背広だが、女客はかなり着飾って来ている、中にはロングドレスを着ている者もある。日本ではロングド

レスを着る機会も場所もほとんどないのに、ロングドレスの普及は驚くばかりである。正確に言えば、六時からの会にロングドレスは不適當なのだが、八時以降深夜に及ぶ夜会などないに等しい日本では、こんな折にでも着なければ、せっかく作ったロングドレスに袖を通すチャンスはない。

景子は、クラス会に出たままの昼のスーツで、華やかな会場へはいつて行くのは気がひけた。少女たちもドレスシィな服装をしているのに、史織は紺のブレザーコートにチェックのブリーツスカートという、いつも通学に着ている服装のままである。

「よく来てくれたわね」

翠は嬉しそうに二人を迎えた。社交が苦手の景子は返事を洩っていたのだ。

「私たち、こんな恰好で来てしまっただ」

美しいプリントのアフタヌンドレスを着て客の応対をしている翠に、萎縮した気持ちで言うのと、

「あら、ちっともかまわないのよ。ジーンズの人もいるくらいですもの」

翠はこともなげに言い、ぎっしり詰まった席に椅子を二つふやしてくれた。景子は、人々の中に埋もれて、漸く心地が ついた。

その夜、翠のサロンのオープンを祝って、若い男性のフ

ラメンコの踊り手がフラメンコを踊った。景子は、映画やテレビの画面でしか観たことのないフラメンコを間近に観て、血がかき立てられるような気分を味わった。

フラメンコは、ステージで観ては感動は伝わりにくい。同じフロアで、汗がふりかかるような間近に観てこそ、醍醐味が味わえるのだ、と翠が言っていたのが、実感された。

贅肉というものはわずかもついていない、しなやかで強靱そうな軀、手を打ちならし、激しく首を振り向け、軀をひねる度に、汗が照明に光って飛び散るのが景子の席からも見える。

金の刺繍がほどこされている黒いベルベットの短い上衣を脱ぎ捨てると、白い絹のブラウスに汗がにじんで肌の色が透けて見えるのも、ひどくセクシーであった。削がれたような腹、高い位置にある腰、長い脚が強く床を踏み鳴らす響きが、景子の足許の床にまで伝わってくる。

若いフラメンコの踊り手に性的な興奮をかき立てられて、景子は傍らの娘に後めたい思いを抱いたが、母に似て小柄な史織は、席から立ち上がって珍しい踊りに見入っていた。

予定の演目が終わり、アンコールに応じて更に一曲踊られた。それでも鳴り止まぬ拍手に、

「みなさん、藤木さんと御一緒に踊ってごらんになりませんか」

翠が声をかけ、前列にいた二人の若い女客の手を引いてステージに誘った。ためらう二人に、

「私も踊ってみますわ。この際藤木さんに教わっちゃいましょう」

などと屈託のない声で言い、フラメンコギターの演奏者達に合図を送った。景子は、翠がフラメンコを習っていることなど全く知らなかったが、多少のレッスンは受けたことがあるらしい踊りぶりだった。

高校時代、翠はそれほど目立つ少女ではなかった。勉強も中位、運動会や音楽会などの時も、活躍していたわけではない。高校卒業後は女子大の家政科に進み、夫とは平凡な見合い結婚だった。

その頃の翠と、手を打ち、足を踏み鳴らしてフラメンコを踊っている翠とは、どうしても結びつかない。

フラメンコを楽しんだあと、食堂には立食形式の食事が用意されていた。ひどく喉が渴いているので、パンチボウルにはいつている赤い飲み物をグラスについてひと息に飲むと、かっとなが熱くなった。

「お母さん、これお酒がはいっているんじゃない？」
史織も頬を火照らせ、うるんだような眼をしている。